

大津百町瓦版

大津・町家・まちなか・いろいろ情報

夏 季 号 [No. 48]

2021年 7月

発行 大津の町家を考える会

大津市中央1丁目8-13

TEL・FAX 077-527-3636

Email: otsu.machiya@gmail.com



『東海道名所図会』

江戸時代の旅のガイドブック

『東海道名所図会』が刊行されたのは寛政九年(1797)です。それまでも図会式の東海道を題材にとったものが「東海道名所記」「東海道駅路の鈴」など、道中記に近いものが幾つか出されていました。また他にも各地域・地方ごとに名所図会は江戸時代に多く書かれ発行されています。

東海道沿いの博物館などで海道関係の展示等される時には必ずといっていいほど、この名所図会からその土地に該当する部分を開いて展示しています。実物をご覧になった方も居られると思います。これは全六巻に分かれ、書かれている絵はそれぞれの地域の画人三十人が担当、この絵の大部分は真景で文章は街道筋にかかる事物を中身だけ紹介され、物語風ではなく今日のガイドブックと同じ形式になっています。

またこの時代に出された名所図会や浮世絵などは江戸から京都へ、旅のゴールにふさわしい京の都、上方への進行方向に巡って行っています。しかしこの『東海道名所図会』は京から江戸への下り方向から巡り書かれています。

上の絵は「走井の茶屋」です。現在も残っている「月心寺」ではと思われま。走井については広重も北斎も同じ様な構図の絵を書いていきます。明和年間(1760頃)から走井餅を商いこの絵でも其の様子が描かれています。また当時から庭園も有名で銀閣寺と同じ相阿弥の作庭と云われ、当時の名園案内にも書かれおり客の求めに応じてお庭も見学させていたとか。明治中ごろの写真には店先に少女が立っているものや、お客を乗せた人力車の車夫が井戸の水で喉を潤しているものがあります。

絵の上部に書かれている文言は

走井はこのほより三名水のその一にして、炎暑の時旅の古を潤すなり。四時ほおとして湧出し清冷甘味なり」

走井にひたもの涌くやちり紅葉湘夕」

【瓦版編集担当】

江戸時代の名所図会から大津を見てみよう

賑やかな大津百町

京都から一番目の『大津の駅』についての説明文は次の様な文で記されていました。

京師より初めの^{うまつぎ}駅なり。これより東を^{ばんどう}関東とも坂東ともいふ。関東二八州、関西三八州。京よりこまで三里、大坂より十
四里なり。また草津まで三里半なり。旅籠町の名を八町といふ。この地は北越^{はくえつ}および淡海^{おうみこくちゆう}国中の産物・魚物等船にて運
び、日ごとに市をなして京都へ交易す。町数九六町、^{だいみょう}諸侯の蔵屋敷多し



なり。 上古志賀郡、大津宮などむかしながの遺風とぞしられける】

ここは百町の馬場町という所でしたが、薪柴を売るものが多く柴屋町と呼ばれていました。いつ頃からか遊郭で有名になりました。それもやはり絵に添えられて文の通り、淡海一の水門（港）であり諸侯の蔵屋敷があったからでこそと思われます。

下の絵は大谷から追分付近の大津絵を売る店が描かれています。【絵文 大津絵はむかしここに岩佐という者住みて書き初めしより、今にその筆勢い遣りて古雅なるを名物と賞ずるならん】 大津絵とそろばん、針のことも書かれています。

【絵文 大津八丁札ノ辻千観の馬もせはしやとしの暮】

上の絵は東海道名所図会ではなく「近江名所図会」の『大津八丁札の辻』の場面図です。まさに大津の中心部当時の大津百町の賑わいが本当に良く分かります。

そこには侍、町人、人足、博労等々七十人近くの人物が描かれており、喧嘩をしている者や言い争っている者随分賑やかな、活き活きとした町の様子が見てとれます。絵の右方向に馬神さんがあったようです。



東海道名所図会は単に海道筋だけの名所ではなく、海道から離れた三井寺、石山寺、日吉山王についても描かれ、日吉山王ではお山の中の宮、山王祭の様子、唐崎の船渡御等々絵図にも解説文にもかなり詳細に書かれています。

同じく三井寺でも絵図も三面、別所が在る山、中心部の図、大門付近の図があつて、山内にある明神の数々また別所や唐院、金堂等々お堂はもちろん詳しい建立についても説明があります。

この『東海道名所図会』は近年になっても角川書店やペリカン社から新訂版が復刊されていますので図書館で閲覧できます。



これは芝屋町の花魁道中の様子をかいいたものです。

【絵文 大津芝屋町の花の曙に、月まつ宵の賑わいは淡海一州の水門にして、諸国の蔵第(くらやしき)あるがゆえ

安楽好正さんの思い出

「大津の町家を考える会」結成時の発起人で元会員の安楽好正さんが今年5月10日に亡くなりました。共に活動した会員に生前の思い出などをお願いします。

安楽好正さんとの出会い

平成元年に瀬田に龍谷大学瀬田キャンパスができて、福井から大津に戻ってきました。戻ってきて、学生などと一緒に街を歩き始めました。学生と歩いていた時、しきりに家の写真を撮っている人がいて、その人が安楽さんでした。町家の二階は出窓になっていて、その腰板とこの木製の側面の部分が透かし彫りになっていて、鳥だとか風景だとかいろんな模様が彫ってあって、それが面白いので、写真を撮っているのだという事でした。私も町家に興味を持ち始めていた頃で、だんだん潰されていく町家を何とか残せないかなーと考え始めている頃でしたので、一緒に街を歩き始めました。安楽さんとの出会いです。

いろいろ町家について話をしているうちに、町家を残すために会を作ろうという事になり、魚忠で発足会を開くことになった次第です。その頃は、今の様に百町館という拠点も無かったので、一緒に街を歩いてマップ作りなどをしていたように思います。

【「大津百町我儘百景」から安楽氏撮影の写真】↑

その後、安楽さんが市議員に立候補するというので、手伝ったことがありました。嘉田さんの関係の選挙などで安楽さんと出会う事があって、選挙に興味を持ってもらえるのかと思っていましたが、市議選に出るというので、びっくりしました。いろいろお手伝いをしました。当選されて活動の場を広められて良かったと思いますが、個人的には、市政の報告会などの案内もなく、ちょっとがっかりの結果でした。

私とは発想とかが違って、楽しい方でした。ご冥福をお祈りします。

大津の町家を考える会 会長 笹 文彦

安楽好正さんを偲ぶ

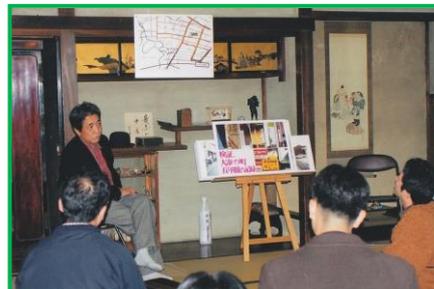
2021年5月10日、安楽さんが他界された。

安楽さんとどこでお出会ったのか、全く記憶がない。1997年7月5日に行われた「大津の町家を考える会」の発会式にお誘いいただいたので、それ以前のことになる。当時から「大津考現学倶楽部」を主宰されており、大津のまちなかにある面白いものをあれこれと発見しては写真と文章で切り取り、2013年に「大津百町我儘百景」として出版された。

「大津の町家を考える会」が発足してからは、町家マ

ップづくりなどに熱心に取り組まれていた。「まちづくり大津百町館」がオープンし、その後から開催した「百町館十一の夜話会」では、「福山聖子のまちなかを描く」や「検証。大津の町、五年間の記録」を担当され、大津のまちなかの魅力やその変貌について報告された。

百町館の看板や店頭幕は味のある書体で書かれている。グラフィックデザイナーであった安楽さんの作品である。



【百町館十一の夜話会(2001.11.25)】

そんな安楽さんは、百町館の蔵を使ってバーを開きたいとの強い思いを持っていた。「電腦情報交差店・安楽堂(インターネットSAKE BAR ANRAKU-DO)」と題する企画書を百町館運営委員会に提出されたが、周りの理解が得られず実現にはいたらなかった。

デザイナーとしての感覚とやりたいことを「楽しむ」という気ままさで、あれこれと取り組まれていたが、町家を考える会からは徐々に離れられていったように思う。

そんななか、2019年12月20日、私がパーソナリティを務めていた「FMおおつ」の番組(イブニングおおつ金曜日)に、山田隆さん(安楽さんとはデザイン関係の仕事仲間で、打出中学校野球部の先輩と後輩の間柄)と一緒に出演してもらった。自らを「やんちゃなじいちゃん」と自己紹介し、大津のまちなかや打出中学校野球部の思い出をいつもながらの渋い落ち着いた調子で、あの「にちゃ〜」とした笑顔を時たま見せながら、楽しくおしゃべりしてくれた。何曲かリクエストしてくれたなかの一曲は「ナオミの夢」であった。結婚式でお色直しをされた新婦(奥様のお名前がなみさんとのこと)がこの曲にのって入場したとのこと。愛妻家・安楽を改めて感じた時間であった。

生まれ育った大津のまちなかを愛し、自由気ままに遊び心に乘って、「やんちゃ」に生きた安楽さんであったと思う。奥様に先立たれ、寂しかったんだろうな……。

あちらで、奥様と気ままに楽しく過ごされているに違いない。



【FMおおつで左から安楽さん、山田さん、私(2019.12.20)】

会員
森川 稔

日本美術品に光を当てた2人のアメリカ人

フェノロサ、ビゲローのお墓がある

三井寺・北院 法明院はご存知ですか

三井寺・北院の法明院にはアーネスト・F・フェノロサとウィリアム・S・ビゲロー二人のアメリカ人のお墓があります。徳川幕府から明治時代が変わって、明治政府はそれまでの鎖国政策から一転欧米を意識した政策を取り入れ、欧米人講師を多く雇い入れました。

フェノロサは明治11年(1878)にモース(明治5年来日し大森貝塚の発見)に誘われなんと25歳で帝国大学の講師として来日し、帝国大学で哲学・進化論を教えます。

失われ行く日本美術品

彼が来日する少し前の日本は、明治になっての廃仏毀釈等により全国で貴重な日本美術品が放置され、散逸していました。ところがウィーンで開かれていた万国博覧会で日本の古美術品が大きな反響を呼び、明治政府は伝統美術を保護奨励する方針に変わっていきました。

これは来日した**フェノロサ**により大きな影響を受けたと云われています。彼は多くの仏像や絵画と出会い審美眼を発揮。教え子の**岡倉天心**、フェノロサの後に来日した富豪の**ビゲロー**らと、約12年間もかけ貴重な日本

美術品の発見と収集に情熱を注ぎました。

フェノロサとビゲローは日本美術の復興・保護を進める中で、当時教部省教導職を命じられ東京に向いていた**法明院九世住職桜井敬徳阿闍梨**の教えを受けます。フェノロサとビゲローは何度も法明院を訪れ、敬徳和尚の法話を受けるなどする中で受戒し仏教徒に転じました。また日本初の博物館(現在の東京国立博物館)の初代館長となった**町田久成**も桜井敬徳住職から受戒を受けます。

明治初期日本の文化財保護に尽した三人が眠る法明院

町田久成は薩摩藩遣英使節団の副使として渡英、大英博物館を訪れた事から日本でも博物館の必要性を説き、文化財保護に情熱を傾け明治15年(1882)現在の東京国立博物館の初代館長になりました。この町田の尽力で誕生した博物館を継承・発展させたのがフェノロサの教え子で文部官僚となった岡倉天心でした。

フェノロサ、ビゲロー、町田久成の三人は桜井敬徳阿闍梨の教えを受け、没年はそれぞれ違っていました。三人はいずれも希望し法明院に墓地を望み葬られました。

法明院はお庭もお墓も美しい所です。秋はまた本当に綺麗です。お庭お墓へ入られる時は志納金もお願いします。

気になるお店



『KIKAKEKKO』

ガラス・陶芸・アクセサリ

住所：大津市大門通四の三
電話：077(509)1784
営業日：水曜から日曜(月火は休業)
午前11時～午後5時までです。
前の道路は車が通行出来ません。
三尾神社駐車場2番3番が駐車場です。
木曜1時～3時に二階のお部屋で着付け教室もやっています。
お店の名前は、来たお客さんに、お店をキツカケに少年がかけっこするようにワクワクしてほしいから付けたとの事です。



んの若いお二人です。京都の洋食器の会社で働いていたそうですが、和の器を扱いたいと独立して大津でお店を開いたそうです。
大津は故郷の尾道に似たところがあって、浜大津に住んでいたこともあって、たまたま疎水沿いに古い町家が空いたためとの事です。若い方がこのような素敵なお店をどんどん開いてくれれば、大津も素敵な街になるでしょう。

今号の『気になるお店』は疎水・鹿間橋のすぐ傍・長等小学校近くの疎水沿いの町家を改造して素敵なお店ができました。
『KIKAKEKKO』です。陶器、ガラス、木工、装飾品の全国の作家の作品を売っています。
焼き物では、信楽、丹波、福岡県の糸島、長岡(美野里焼)など一五名ほどの作家です。
ガラスは、沖繩の稲嶺盛吉の直弟子の作品や岐阜の作家のものなど。アクセサリは、尾道の作家。木工は、糸島の作家。という風に店主の好きな全国の作家の作品です。お店をやっているのは、辻智巳さんと伊波智香子さ